



Title	教師の実践的力の熟達化に関する文献学的検討 : Sensitivityとは何か
Author(s)	藪下, 美幸; 厚東, 芳樹; 国兼, 慶
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 128, 27-39
Issue Date	2017-06-23
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.128.27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66768
Type	departmental bulletin paper
File Information	030-1882-1669-128.pdf



教師の実践的力量の熟達化に関する文献学的検討

－Sensitivityとは何か－

藪 下 美 幸*・厚 東 芳 樹**・国 兼 慶***

【目次】

1. はじめに
2. 研究方法
 2. 1. Sensitivity研究の時代区分
 2. 2. 文献収集
 2. 3. 手順
3. Sensitivity研究小史
 3. 1. Sensitivity研究の創始者クルト・レヴィンについて
 3. 2. Sensitivity研究の萌芽
 3. 3. Sensitivity研究の発展－Sensitivity訓練の誕生－
 3. 4. Sensitivityがどのように教育界に導入されたのか
4. おわりに

参考文献

【キーワード】 Sensitivity, 教師教育, 文献学的検討, 良質な集団

1. はじめに

教師の発達研究や体育授業への取り組みに関する研究は、未だ不十分であり、教師の成長プロセスや効果的な方法論については不明な部分が多いと指摘されている（Armour, 2006：Armour&Yelling, 2007：坂本, 2007）。こうした中、体育授業における教師の「出来事の予兆」への気づきとそれに対する「推論－対処」の内実が、より「良い体育授業」の創造と関係することは経験的に知られている。著者らの「出来事」研究の一連の成果の中でも、上述した現象が示唆されている（厚東ら, 2004：厚東, 2014, 2015a：厚東・金須, 2015b：厚東ら, 2016）。これは、良い体育授業を展開する教師は、膨大な経験の蓄積（楠本ら, 2015）に基づき実践知を深化・拡大させてきており、その知によって多様な「出来事の予兆」に気づき、対処していることを示唆している（東・梅野, 2000：鈴木, 2003）。これより、教師の「出来事の予兆」への気づきとそれに対する「推論－対処」は、教師の成長プロセスや効果的な方法論を解明していく手がかりの一つに成り得ることがわかる。

しかし、良い体育授業を展開できる教師の実践知は膨大な経験によって形成されるため、例えば新人レベル（Benner, 1984）の教師に彼らと同様の気づきが生起するとは限らないもの

* 北海道大学大学院教育学修士課程 ** 北海道大学大学院教育学研究院准教授

*** 北海道大学大学院文学研究科修士課程

と考えられる。もっと言えば、教師のラベルやレベルに合った学びが存在するはずであり、学ぶべき順序があるものとする。

こうした問いに対して、Tsangaridouら（1994, 1997）の報告は一つの示唆を与えてくれる。彼女らは、教育実習生の省察の中身を質的に分析したところ、‘Technical’や‘Situational’の省察は教育実習生でも深化させることは可能だが、‘Sensitizing’の省察は困難であったことを報告した。これより、少なくとも‘Technical’‘Situational’の学びの上に‘Sensitizing’が積みあがるものと予想できる。

ここで、これまで著者らは‘Sensitivity’を感性と捉え、‘Sensitizing reflection’を「感性的省察」と翻訳し、上記の省察は‘Technical reflection’と‘Situational reflection’とを総括する能力と捉えていた（長田ら、2010）。一方、先述したTsangaridouらをはじめアメリカの教師教育分野では、上記三つの内容を並列的な能力として扱い、‘Sensitizing’を子どもの反応や学び方の観察から生起する省察（四方田ら、2013）と捉えており、著者らの捉え方と相異した。

こうした相違には、著者らの研究ではアメリカでスタートしたSensitivity研究で‘Sensitivity’がどのように捉えられ、教師教育の中に導入してきたのか十分に押さえないまま議論してきたことが関係している。

そこで本研究では、Sensitivity研究を最初に理論化したクルト・レヴィン（Kurt Lewin）の研究小史を整理し、「sensitivityとはどのような能力なのか」「sensitivityがどのように教育学の研究の世界で扱われてきたのか」を押さえ、優れた教師になるための実践学的検討を進めていくための手がかりを得ることを目的とした。

2. 研究方法

2.1. Sensitivity研究の時代区分

Sensitivity研究の第1人者は、アメリカのクルト・レヴィン氏（以下、レヴィンと称す）である。レヴィンは、心理学で最も生産的な学派の代表者であり（松野、2004）、理論性よりも実践性を重視した研究者の一人である（吉田、2008）。そこで著者らは、上記レヴィンの生い立ちを記した著者や彼に関わった著書を収集した。合わせて、1917年以降から2000年までの約80年間にわたるアメリカのSensitivity研究の文献を収集した。なお、原本の中には入手が難しいものが存在し、すべてを収集することが困難であったことから、レヴィンに関わった著書はすべてわが国で入手可能な翻訳書とした。

また、Sensitivity研究含めた教師の力量形成の研究について、教師の力量形成に関する研究は、あらゆる分野に研究が分散しており、これらをすべて網羅することはきわめて困難であると言われている（岸本・久高、1986）。加えて、レヴィンを中心とした研究グループは心理学の分野で最も生産的なグループの一つと言われている（松野、2004）。

そこで本研究では、レヴィンのSensitivity研究と上記の研究に関わりの深い人物の研究に検索範囲を制限し収集した。その結果、次に示す3期に分類することが可能であった。

まず、レヴィンが大学の講義を契機に集団活動のあり方がSensitivityの育成に有効であると

仮説し、そのことを実験室ではなく実践の場で経験的に確かめていく過程でSensitivity研究の下地をつくっていった時期である。

次に、人種差別問題が深刻化する中で、レヴィンのSensitivity研究が注目されるようになった。その結果、1946年、コネティカット州教育局の人種差別問題委員会とマサチューセッツ工科大学集団力学研究所の共同研究の中心人物としてレヴィンに協力依頼がきたのである。つまり、Sensitivity研究が開花した時期である。また、そこでの活動が教育界も含めて多種多様な分野で導入され、Sensitivity研究が一気に発展した時期でもある。

最後は、レヴィンらの手法が学校教育現場では受け入れられず、人種差別問題が益々激しさを増していた。これを受けて、Sensitivity研究は学校教育現場から教育実習生の教育現場へとステージを移し、早期から教師のSensitivityに関わった力量形成を試みる時期へと進んでいったのである。

2.2. 文献収集

前項の時代区分から、レヴィンのSensitivity研究と上記の研究に関わりの深い人物の研究に検索範囲を制限し収集した。それ故、今回、インパクトファクター値（石黒，2004）は踏まえず収集した。すなわち、わが国で入手可能なレヴィンに関わった著書やSensitivity研究に限定して収集した。

2.3. 手順

- ①Sensitivity研究の創始者であるレヴィンの生い立ちなどから、なぜSensitivityに着目するようになったのか押さえる。
- ②Sensitivity研究にみる3つの時期の先行研究を批判的に検討する。
- ③上記②を踏まえて、優れた教師になるための実践学的検討を進めていくための手がかりを導出する。

3. Sensitivity研究小史

3.1. Sensitivity研究の創始者クルト・レヴィンについて

ここでは、Sensitivity研究の創始者であったレヴィンが、そもそもなぜSensitivityに着目したのか押さえた。

彼は、1890年ドイツ（現ポーランド領）でユダヤ系ドイツ人として誕生した。1909～1914年は、ベルリン大学で学生生活を送っていたが、第一次世界大戦が勃発した。そこで、1914年に自ら志願し戦場へ向かっていた。彼は、この戦争で弟のフリットを亡くしていたが、彼自身も大きな戦傷を負った。レヴィンは、弟の死を無駄にしないためにも、第一次世界大戦の4年間で塹壕で過ごした経験を閉じ込めず、発展させていくように努めた。こうして執筆したのが「戦場の風景（Lewin, 1917）」であった。

その著書の中で彼は、戦争の経験をまったく耐えがたいものだとは述べていなかった。これには、彼が自分の経験を特殊的な概念で生起していたからだと考えたからである。例えば、彼

は兵士が前線に接近してゆくに従って、風景の見え方が変容することについて、「物理的な環境はそれを見る者の独自の知覚的要求の差によって違って見え、食物、敵に対する有利な態勢等々を求めているのであるが、風景をある見方で見るようにさせ、他の見方をさせないのは兵士のそうした要求なのだ」と述べ、特殊な経験の場にいる人間は物事の捉え方の概念を歪めることで耐えられないものでも耐えられるものへと変換するというのである。また、「兵士がまだ前線から遠くにいるときの平和の風景は、あらゆる方向に無限に延び方向をもっていない。しかし、兵士が敵に接近してゆくと、風景は境界をそなえてくる。この変容は単に危険の増大の意識としてのみ記述することはできない」と述べ、一般的な「平和物」と「戦闘物」の差も、その場の環境によって見え方が異なることを記していた。そして、例えばモノゴトを平和の文脈か戦闘の文脈なのかという空間によってSensitivityが大きく異なるとまとめていた。このようにして彼は、空間や場の状況によってSensitivityが異なった姿をみせることに興味を示すようになったのである。しかしながら、上記の著書の中でSensitivityという単語を用いつつも、それが何を示しているのかというところまでは記していなかった。

3.2. Sensitivity研究の萌芽

1921年、大学講師になったレヴィンは、講師として学生同士の討論の時間を多く設けた講義を展開した。弟子のドナルド・アダムスによると、「人数は3～4人、多くても10人。2時間でも3時間でも何時間でも討論をし、出たり入ったりは自由、思いつきの質問からはじまり、変化し、別のことを持ち出すこともしばしばあった。重要な最初の問題とかけ離れたものが出てくる。レヴィンは支配的でも圧倒的でもなく、大胆な思いつきに対しても耳を貸そうとした」と述べ、小集団討論によって学生たちのSensitivityを高める取り組みを試みていたという。つまりレヴィンは、人間は個人の特性によるだけではなく、その人が置かれた「場」に影響を受けて行動するものであり、個人の特性と環境の両者が担保されてはじめて期待する行動が現れるとする「場の理論」を展開したのである。このように、小集団による討論の場を設け、学生同士がその中で何を感じ、どう変化するのか実践的に検討し、人間のSensitivityに関する研究の下地を作っていたのである。

1930年代後半のアメリカでは、産業環境の問題が激しい論争をよんでいた。こうした中、1939年に彼自身がこの手の問題を取り扱う機会に出会った。ハーウッド製造会社は、バージニア州の農業地帯に新しい製造工場を開設、300人の未経験労働者を12週間ほど訓練し、北部工業地帯の高い水準を目指していた。ところが、個々人の働く気持ちは強くても、職場での作業習得はなかなかうまくいかず、生産量は北部工業地帯の水準を大きく下回っていた。そこでハーウッド製造会社がレヴィンに協力依頼を行い、8年間協力することとなったのである(Jenkins, 1950; Lewin, 1956, 1959)。

レヴィンは、第一に個々の従業員に対して監視の圧力が強かったことに気づき、それを止めることにした。つまり、絶対的な「主-従」関係を廃止したのであった。第二に、労働者を個人単位ではなく、集団を構成し集団単位で行動するようにした。これにより、多くの集団の生産量が伸びた。一方、未だ、生産量が十分に伸びない所も存在した。上記の背景として、レヴィンは集団内で目標を共有できていたかどうかに関係していたと推定した。そこで第三に、別の地域での活動経験者を採用し、生産量の伸びない集団で指導者役として活動してもらうことにした。その結果、集団毎に現実感のある目標値を共有するようになり、北部工業地帯の水

準に近いところまで生産量を上げることに成功したのであった。(日本グループ・ダイナミクス學會, 1951, 1954, 1985, 1988)。

こうした経験を通して、レヴィンは個人ではなく集団という単位で目標値を設定し、それに向けて異なる者同士が行動すること、その過程でそれぞれの考えやお互いの意見をぶつけ合う環境をつくることで、好ましい成果が得られやすいことを学んだのである。ここから、‘Sensitivity’ = 異なった相手であっても、互いが主体的で協働的な活動を行いより良い解決策を導き出す良質な集団力という考え方を固めていったものと考えられる。これより、‘Sensitivity’ とは「異質な個体同士による良質な集団力」と捉えることは可能であろう。それ故、教師の ‘Sensitizing reflection’ とは「異質集団による良質な集団力の発揮に関わった省察」と考えられる。

1940年代のアメリカでは、人種差別問題の深刻化に歯止めがかからない状況にあった。そこでレヴィンは、多様な人種・宗教の人にも平等に開いた公共住宅を提供し、異質な人間同士が関係をもつ場を設定することの効果をみる取り組みを行った。

まず彼は、2種類の住宅環境を用意した。1つはチェス板の目のように別々の建物を作り、黒人と白人は別々に住んでもらう分離住宅、もう一つは無作為な形で住んでもらう共同住宅であった。生活過程の中で互いの関係や状況を聞き出すために2時間程度の面接を定期的に行った。その結果、2つの住宅環境で住民に明らかな相違がみられたことを報告した。すなわち、分離住宅では白人の黒人に対する不満が募り、もっと分離の程度を高くしてほしいという意見や偏見が強くなっていた。そこでは、黒人主婦と白人主婦が互いに疑義深くなり、敵意をもち、ストレスをためる傾向にあったという。一方、共同住宅では、住まいに愛着がわき、心から相手の魅力に惹かれ、良好な関係となっていた。緊張はゆるみ、反感はなくなり、人情という友好的な感情が芽生えていた。なかでも、白人世帯が黒人世帯を受け入れ、お互いの関係を誇りに感じていた。このことから、レヴィンは空間のあり方によって人間関係は大きく変化するという結論を導き出したのであった。そして、上記の研究を契機にレヴィンはリーダーシップと集団という環境を整えた上で、「異なった相手であっても、互いが主体的で協働的な活動を行いより良い解決策を導き出す良質な集団力」を ‘Sensitivity’ と捉えていった(マロー, 1972) ものと考えられる。

その後、レヴィンを中心とした研究グループは社会的意義の大きな先駆的実験をいくつも指導していた。なかでも、‘Sensitivity’ の向上を柱に、コネティカット州人種関係委員会が援助してきた人種差別問題に取り組んでいた。ところが、1947年、志し半ばで彼は亡くなってしまった。

3.3. Sensitivity研究の発展－Sensitivity訓練の誕生－

Sensitivity訓練の基礎をなす諸原理は、1946年コネティカット州ニューブリテン市の州立教育大学で催されたワークショップにその源を訪ねることができる。

1940年代のアメリカでは、人種差別問題の深刻化に歯止めがかからず、その解決策すら見いだせないでいた。そこで1946年、コネティカット州教育局の人種問題委員会(Connecticut interracial commission)とマサチューセッツ工科大学集団力学研究所とが協力し、実験的な取り組みを行っていくことにした。このとき、コネティカット州教育局の人種問題委員会の主要メンバーであったケイとリビッドらがレヴィンの取り組みに着目し、レヴィンに人種差別問

題の解決・解消に取り組む委員会への参加を要請した。そして、レヴィンはワークショップの総代表役として取り組むことになった。

研究者たちの意図は、集団をまとめ上げより良い人間関係を構築できるリーダー養成にあった。ワークショップに参加したのは、おもにソーシャルワーカーと教育関係者であったが、ほかに少数の産業界の人たちや一般市民も参加していた。

1946年にスタートしたこのワークショップでは、10人1組の3つの集団を構成し、集団内でのディスカッションが大半を占めていた。そこでは、研究者たちが持ちこんできた現場の諸問題を、集団で分析することに中心がおかれていた。そして、現場の諸問題の行動的側面を診断し解決するいろいろなアプローチ方法を検討するため、集団討議や役割演技（ロール・プレイング）といった取り組みが行われた。

各集団には、ひとりの観察者役が配置され、あらかじめ作成した観察計画にしたがって集団内での相互作用やメンバー同士の話し合いが記録された。なかでも、表情なども含めた話し合いのときの様子や話し合いの中身の発展過程を念入りに観察・記録した。

こうした取り組みは、Sensitivity訓練と称され、後に多様な分野で採用されることとなった。なお、Sensitivity訓練の形や名称は、Tグループ (Training Group)、ラボ・グループ (Lab-Group)、ベーシック・エンカウンター・グループ (Basic Encounter Group)、ワークショップなど、多様にあった（ブラッドフォード、1971）。

3.4. Sensitivityがどのように教育界に導入されたのか

1950年代の学校は、いわゆる教育の現代化運動による問題と合わせて、学校内の人種差別問題が深刻化していた。とりわけ、1954年、学校内の人種差別は憲法違反ではないというアメリカ最高裁判所の判決により、社会的に法外な責任を学校現場に与えた。それ以後、学校現場は、大変難しい人種差別をはじめとする闘争の本拠となった（ドベス、1977）。銃剣をもった兵士によって護衛されながら黒人の生徒が授業を受けること、完全に公教育を廃止する教育委員会が存在し、白人の子どもだけが在学する私立学校を補助したこと、など大きな差別問題を抱えていた。また、黒人の子どもに対する乱暴行為も深刻化した。

例えば、1954年2月アラバマ州立大学に入学したオーザリン・ジュアニータ・ルーシーという黒人少女の事件である（梶山、1975）。ルーシーは、講義初日の夜から激しい差別を経験することになった。千人近くもの白人学生が黒人排除を呼びかけ、学長宅へデモを行った。また、別の場所ではKKK団のリンチの前ぶれともいべき十字架に火をつけて燃やす行為も生じた。翌日、騒ぎはより大きくなり、街いっばいにルーシー反対の暴徒があふれていった。事態は過激になり、無関係の黒人が所有する自動車がひっくり返されるなど社会を巻き込んでいった。

また、1957年9月には9名の黒人高校生（男子3名、女子6名）が入学を許可され、アーカンソー州のリトルロックにある公立のセントラル・ハイスクールに向かうも、初登校の日、彼らは登校を待ち受けていた白人群衆にとり囲まれ、罵声をあびせられ、学校の門をまたがずに押し返されてしまった。後日、黒人高校生は父兄と学校へ向かったところ、ふたたび待ちかまえていた白人の群衆に袋叩きにあうという事件が起こった。

こうした人種差別問題の中で、レヴィンと共同研究を行っていたハンソン（1951）は、1950年代初頭から‘Sensitivity（異質な個体同士による良質な集団力）’を荒れた教室へとという想

いを抱き、自身が勤務していたイリノイ大学附属高等学校でアクション・リサーチを行った。具体的には、自身が担当する世界史の授業の中で、これまで少数の優秀な学生と教師との話し合いの中で進んでいた授業を反省し、すべての生徒の意見を集約して進める形のものへと変えたのである。また、同校の生徒会やホームルームの中で、学生全員の信頼と尊敬を得ている学生をリーダーと置き、それぞれの集団を組織していこうとした。

同様に、Trowら（1950）は生徒同士が「お互いが主体的に関わり、両者の関係を良好にしていく集団力」を育成できる環境づくりを目指して、自由に議題を設定し集団討論する時間を学級の中に取り入れるなど、学級活動の時間増加による取り組みを行った。その他にも、多くの研究者が人種差別問題をはじめ荒廃していく学校教育現場に危機感を抱き、多様な集団活動の導入を試みていた（ブラッドフォード、1971）。

しかしながら、いずれの取り組みも失敗に終わった。その理由として、（１）いずれの取り組みも教師と生徒の「主―従」関係の下で行われたこと、（２）英語、数学、理科、社会の主要教科については、習熟度別のクラスが普通であり、授業一つをみても集団の構成メンバーが常に流動的であったこと、（３）ホームルームがない学校も多く、学校からの連絡事項は直接保護者宛てに郵送やEメールや掲示板で告知されていたこと、（４）集団の構成人数が10人など比較的多かったことなどが、原因として考えられた（金子、1985）。

また、当時の学校現場では多くのギャング集団が存在し、学校内外での犯罪や暴力事件が多発するなど、集団でディスカッションする場にすら行き着かないことがしばしばあったという。いずれにしても、‘Sensitivity’を荒れた教室へという取り組みは、悉く失敗に終わったのである（ローレンス、1999）。

このことについて、マイルズ（1971）は、「この当時は、教育実践との間に相互的な寄与が可能であるという、かなり楽観的な見方が存在していた。しかしこの楽観論からは、包括的で充実した活動が生み出されなかったことを率直に認めなければならない」と述べ、研究者や実践者側の想いと教育現場の実際との間にあまりにもギャップがあったと指摘した。マイヤーズ（小野、1982）も、どんな優れたプログラムやカリキュラムであっても、それを成功させた教師は伝統的な教授法に長けた教師や学校、学生集団であったとする皮肉な結果であったと報告していた。

こうした一連の失敗を受け、アメリカでは学校現場への介入ではなく、教員養成段階の教育実習生を対象に、彼らの‘Sensitivity’を高める実践・研究へと移行したのである。そこではまず、優れた教師の‘Sensitivity’の特徴を導出することが試みられた。

Gooding（1964）は、小学校の教師32名（各小学校校長とカリキュラムコーディネーターが認めた有能な教師19名、そうでない教師13名）を対象に、実際に1ヶ月に渡って授業を実践してもらい、その様子を4名の観察者が20項目からなるチェックリストで評価した。合わせて、彼らへのインタビュー調査も実施し、観察者の評価の妥当性も押さえた。その結果、有能な教師はそうでない教師よりもチェックリスト評価得点が有意（ $P<.01$ ）に高く、なかでも多くの生徒の気持ちを汲み取るための準備をしていたこと、一人ひとりの生徒の行動や思考を考え授業に臨んでいたこと、表面的な回答だけでなく生徒一人ひとりの反応に注意を払っていたこと、といった‘Sensitivity’の形を有していたことを認めていた。

また、Yinger’s（1977）は、経験年数の高いベテラン教師1名と初任教師1名が作成した指導プログラムに着目し、経験年数の高い教師の感受性を指導プログラムや指導案の中から読

み解こうとした。同様の研究は、Hoffman and Armstrong (1975), Hoffman and Sembiante (1975), やBiscan and Hoffman (1976) によっても行われてきた。その結果、いずれの研究においても、ベテラン教師は初任教師よりも指導プログラムの中に生徒一人ひとりの活動内容や活動時の注意事項が具体的に記述されていたことを認め、その背景にはベテラン教師が一人ひとりの生徒の情報を収集することに努めていたことを導出した。

これら一連の研究を踏まえて、アメリカの多くの教員養成大学では、異質な生徒同士が主体的に関わり共働していく集団力を発揮するために必要な教師の力量を高めるためのカリキュラムを模索し、教育実習生自身の‘Sensitivity’の育成に努めている。

シラキュース大学 (Donald, 1971: 木戸, 1973) では、Sensitivity訓練という講義を教育実習前後で必修化し、そこでは大学講師が討論の議題を投げかけ教育実習生同士が集団ディスカッションを行うことで、異質な個体同士が良質な集団力を発揮するための模擬体験的なプログラムを行っている。またピッツバーグ大学 (Joel, 1969) は、臨床場面を通して生徒と直接触れ合う機会の増加を掲げ、生徒という相手に関心をもつことが、教師と生徒との共働的な集団力を構築するための基盤であることを学ぶプログラムになっている。さらに、インディアナ大学 (小川, 2008) の音楽教員養成課程でも、実際に地域の学校に訪問し授業見学や飛び込みで一授業を担当する「実地体験学習」、音楽教育に関する様々な問題を取り上げ専門的な実践的知識を獲得する「音楽コロキウム」、教育実習中に一度大学に戻り教育実習生同士で集団ディスカッションを行う「音楽マスタークラス」など、生徒と少しでも触れ合う時間をつくりつつも、専門的な知識獲得と集団ディスカッション能力に努めるカリキュラムを展開している。

このように、集団ディスカッションを上手くまとめ上げるリーダー性の重要性を学ばせつつ、お互いが主体的で共働的に関わる良質な集団力をまとめ上げる経験を踏ませることを柱としたカリキュラムがアメリカの教員養成教育に導入してきたのである。こうした流れに対して、先述したようにTsangaridouら (1994, 1997) は、教育実習生に‘Sensitivity’に関わった省察を求めることに疑義を呈し、教員養成段階はコンピテンス獲得に焦点化した方がいいのではないかと問いを投げかけたのであった。

Tsangaridouらは、すぐれた教師（時間を惜しまず仕事に熱中する時間的努力や自分が理想とする教師になるための計画的努力、さらには教育と研究に対して人生を捧げる献身的努力を積み重ねることのできる教師）4名を対象に、教師の省察の役割とその機能を明らかにした結果、教師の省察には日々の実践から状況的に実践を追求させたり文脈的に関連づけたりするMicro reflectionと、長年にわたる実践から学級経営や専門職性の発達に影響してくるMacro reflectionの2種類があることを導出するとともに、いずれの教師も‘Sensitivity’が高いことを認めている。その上で、体育専攻の教育実習生6名を対象に、彼らの授業実践記録を整理していくと、生徒の技術面に関わった指導や生活文脈に即した指導についてはその良し悪しに気づき、修正する記録が認められたが、教師と生徒や生徒同士の人間関係という‘Sensitivity’に関わった記録は皆無であったことを報告した。これらより、彼らは教員養成段階にはコンピテンス獲得に焦点化した方が好ましいという結論を導出したのである。

以上、‘Sensitivity’はレヴィンの研究を基盤に、学校教育の中で深刻化していた人種差別問題を解決・解消する目的から教育界にも取り入れてきたことがわかった。このとき、レヴィンの研究を下地に、教育界では教師の‘Sensitivity’を「異質な個体同士による良質な集団力」と捉えられてきたことがわかった。なかでも、教育実習生の‘Sensitivity’を高める取り組み

が教員養成段階より導入されてきた歴史が看取できた。しかしながら、Tsangaridouらの指摘からは、教育実習生時代に‘Sensitivity’を高める取り組みが可能なのかどうかは疑義が残る。つまり、教師のキャリア発達の適時性の問題を乗り越えないまま、優れた教師が有した特徴をそのまま教育実習生に下ろしてしまった可能性は否定できない。今後、Sensitivityを高める取り組みが教育実習生に必要なのかについては検討しなければならないであろう。

4. おわりに

「実践知」とは、「現実知（片岡，2000）」とも言われる「行為能力としての知識（シュテール，1996）」のことである。つまり、実践上の諸問題をどうすればいいのかという視点から多元多層に拓いていく知の枠組みである（梅野，2003）。これより、教師の実践知の獲得にはいくつもの階層が存在し、それぞれの階層に順じた知が存在することが示唆される。つまり、各教師の到達している階層の相異によって有している実践知や用いるべき実践知は異なるのである。

これまで、Teaching Expertise研究の成果を研究方法の視点から検討し、今日的課題を導出してきた（厚東ら，2010）。なかでも、子どもにつまずきを生起させないための学習過程の組織化が重要であり、そのためには授業中に生起する多様な「出来事の予兆」に気づく力量形成が教師には必要であることを指摘した。

このとき、教師の実践知は過去の経験知によって異なるのが現実である。これより、各教師の有している実践知によって「見えるものや観えるもの、聞こえるもの、感じるもの、出来ること」は異なっているのが自然である。それ故、優れた教師を育成する職能発達研究を推進していくときには、各教師の到達している階層を探りつつ展開しなければ十分な成果は得難いものとする。もっと言えば、卓越した教師の実践知の特徴をそのまま教育実習生や新人教師に求めることは避けなければならないものとする。

教師も含めた教える側は、何かを学ぶという用意が学ぶ側に形成されていない状態で無理やり学ばせても十分な成果は得られないことを理解し、学びの順序やペースを考えなければならないのである。本研究より、例えば新人レベルの「教師＝身体」であればコンピテンス獲得に関わった「出来事の予兆」への気づきが必要だが、中堅レベルの「教師＝身体」であれば‘Sensitivity（異質な個体同士による良質な集団力）’に関わった「出来事の予兆」への気づきの積み重ねが必要になるという仮説を導出することができた。今後、教師の実践知の程度によってどのような「出来事の予兆」に気づけるのか検討する必要がある。この手の研究を積み重ねることで、どうすれば新たな実践知を獲得し次のステージへと身体を高めることが可能なのかという問いを解決・解消する実証研究へと着手していく手がかりを得る必要がある。

付記

本研究は、平成27－29年度科学研究費基盤研究（C）・研究代表・厚東芳樹「体育授業における教師の『身体－感性－言語』の関係に関する理論的・実証的研究」（課題番号15K04203）による助成の一部を受けたものである。

引用・参考文献

- Armour, K. (2006) Physical education teachers as career long learners: A compelling research agenda. *Physical education and sports pedagogy*, 11 : 203-207.
- Armour, K.M. & Yelling, M.R. (2007) Effective professional development for physical education teachers: The role of informal, collaborative learning. *Journal of teaching in physical education*, 26 : 177-200.
- 東武志・梅野圭史（2000）体育授業改善に資する身体論的アプローチの可能性－「気（心）－身（心）」視座に立った身体論を手がかりにして－. *体育・スポーツ哲学研究*, 22(1) : 1-15.
- Benner, P. (1984) From novice to expert: excellence and power in clinical nursing practice. *prentice hall*: upper saddle river.
- Biscan, D. & Hoffman, S. (1976) Movement analysis as a generic ability of physical education teachers and students. *Research Quarterly*, 47(2), 161-163.
- ブラッドフォード, L.P (1971) 感受性訓練 Tグループの理論と方法. 日本生産性本部 : 東京, pp.112-113.
- ドベス, M [著] 波多野完治ら訳 (1977) 世界の教育現代教育科学 4. 白水社 : 東京, pp.391-418.
- Donald, R (1971) conceptuallyzing a processs for teacher education curriculum development. *The Journal of teacher education*, 22(1) : 74.
- Gooding, C.T (1964) The Penceptual Organization of Effective Teachers, Combs, A.W. et al. Florida Studies in the Helping Professions, Social Science Monograph No.37, Univ. of Florida Press.
- ハンソン, J・日本グループダイナミックス學會編 (1951) グループダイナミックスの研究－民主教育と集團力學－第1集. 理想社 : 東京, pp.120-133.
- Hoffman, S.J & Armstrong (1975) Congmitive and behavioral components of expertise in teaching in physical education. *Quest*, 46(2) : 149-152.
- Hoffman, S.J & Sembiente, J.L (1975) Experience and imagery in movement analysis. In *British proceedings of sports psychology*, British Society of Sports Psycology: 288-293.
- 石黒武彦 (2004) インパクトファクターの実像と学会誌のあり方. 文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター : 東京.
- Jenkins, H (1950) Psychology of Group Behavior: The Class as a Group. *Jounal of Educational Psychology*, 41 : 322-338.
- Joel, L (1969) A reader's guide to the comprehensive models for preparing elementary teachers. ERIC Clearinghouse on teacher education: Washington, D.C, P.11.
- 金子忠史 (1985) 変革期のアメリカ教育－学校編－. 東信堂 : 東京, pp.107-120.
- 片岡暁夫 (2000) 21世紀におけるスポーツ教育の課題. *日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集* : 21-26.

- 木戸章夫（1973）アメリカにおける教師養成教育改善の動向．九州大学比較教育文化研究施設紀要，（24）：91-111.
- 岸本幸次郎・久高喜行（1986）教師の力量形成．ぎょうせい：東京，pp.1-48.
- 厚東芳樹・梅野圭史・上原禎弘・辻延浩（2004）小学校体育授業における教師の授業中の「出来事」に対する気づきに関する研究－熟練度の相違を中心として－．教育実践学論集，5：99-110.
- 厚東芳樹・梅野圭史・長田則子（2010）アメリカのTeaching Expertise研究にみる教師の実践的力量に関する文献的検討．教育実践学論集，11：1-13.
- 厚東芳樹（2014）プロフェッショナルな教師の体育授業をみる観点は何が違うのか．V2ソリューション出版：名古屋.
- 厚東芳樹（2015a）体育授業における教師の「出来事の予兆」への気づきに関する研究－小学校中学年の場合－．北海道体育学研究，50：113-122.
- 厚東芳樹・金須一昂（2015b）体育授業における教師の「出来事の予兆」への気づきに関する研究－低学年担任教師を対象として－．北海道大学大学院教育学研究院紀要，123：141-122.
- 厚東芳樹・金須一昂・島崎百恵（2016）体育科模擬授業における大学生の「出来事の予兆」への気づきの検討．北海道体育学研究，51：51-61.
- 楠本繁生・田代智紀・會田宏（2015）ハンドボールにおける卓越した指導者の指導力の熟達化に関する事例研究－高校・大学において全国大会で17回優勝している監督の語りを手がかりに－．ハンドボールリサーチ，4：11-20.
- Lewin, K (1917) Kriegslandschaft. Zeitschrift fur angewandte Psychologie 1917, 12, 440-447. GESTALT THEORY, Vol.31, No.3/4.
- Lewin, K [著] 猪股佐登訳（1956）社会科学における場の理論．誠信書房：東京，pp.73-94.
- Lewin, K [著] 三隅二不二訳（1959）グループダイナミックス．誠信書房：東京，pp.341-357.
- マイルズ, M.B・ブラットフォード, L.P（1971）感受性訓練Tグループの理論と方法．和田製本：東京，P.615.
- マロー, A.J [著] 望月衛・宇津木保訳（1972）KURT LEWIN：その生涯と業績，誠信書房：東京，pp.14-17, pp.42-57, pp.248-267, pp.371-374.
- 松野豊（2004）クルト・レヴィンとソビエト心理学．心理科学，24(2)：70-89.
- 長田則子・梅野圭史・厚東芳樹（2010）体育授業における教師の「感性的省察」の実体とその深化．体育・スポーツ哲学研究，32(2)：99-118.
- 日本グループ・ダイナミクス學會（1951）グループダイナミックスの研究－民主教育と集団力学－第1集．理想社：東京，pp.117-136.
- 日本グループ・ダイナミクス學會（1954）グループダイナミックスの研究－集団行動の理論と実験－第2集．理想社：東京，pp.51-84.
- 日本グループ・ダイナミクス學會（1985）グループダイナミックスの研究－実験社会心理学の展開－第3集．理想社：東京，pp.114-160.
- 日本グループ・ダイナミクス學會（1988）グループダイナミックスの研究－集団理論の中核と周辺－第4集．理想社：東京，pp.8-28.
- 小川昌文（2008）アメリカの音楽教員養成システムと音楽授業－インディアナ州とフロリダ州の実例をふまえて－．兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科，pp.69-77.
- 小野由美子（1982）教師の教授行為と子どもの学力発達－プロセス・プロダクト研究の成果と課題－，教育方法学研究，8：45-53.

- ローレンス, R [著] 平野裕二訳 (1999) 学校犯罪と少年非行. 日本評論社: 東京, pp.93-95.
- 梶山正弘 (1975) アメリカ教育の現実. 福村出版株式会社: 東京, pp.79-85.
- 坂本篤史 (2007) 現職教師は授業経験から如何に学ぶか. 教育心理学研究, 55(4): 584-556.
- 鈴木直樹 (2003) 体育授業における教師の身体性に関する研究－「評価する身体」という視点から－. 体育・スポーツ哲学研究, 25(1): 23-35.
- シュテール, N [著] 石塚省二訳 (1996) 実践〈知〉. 御茶の水書房: 東京.
- Trow, C & Alvin, E & Zander, W.M. & Morse, C & David & Jenkins (1950) PSYCHOLOGY OF GROUP BEHAVIOR－The Classas a Group－. Jounal of Educational Psychology, 41: 322-338.
- Tsangaridou, N. & O' Sullivan, M (1994) Using pedagogical reflective strategies to enhance reflection among preservice physical education teachers. Journal of Teaching in Physical Education, 14, 13-23.
- Tsangaridou, N. & O' Sullivan, M (1997) The role of reflection in shaping physical education teachers' educational values and practices. Journal of Teaching in Physical Education, 17: 2-25.
- 梅野圭史 (2003) 「体育」の存在理由を考える－教育学・教員養成の立場から－. 大坂体育学研究, 41: 80-85.
- Yinger' (1977) [Dodds, P. (1994) Cognitive and behavioral components of expertise in teaching in physical education. quest, 46(2): 149-152.]
- 四方田健二・須甲理生・萩原朋子・浜上洋平・宮崎明世・三木ひろみ・長谷川悦示・岡出美則 (2013) 小学校教師の体育授業に対するコミットメントを促す要因の質的研究. 体育学研究, 58: 45-60.
- 吉田道雄 (2008) 実践的心理学に求められる測定と評価－“実践性”と“納得性”からみた教育心理学研究－. 教育心理学年報, 47: 109-117.

Review of the Literature Concerning Teachers Capability —What is Sensitivity—

Miyuki YABUSHITA, Yoshiki KOTO, Kei KUNIKANE

Key Words

Sensitivity, Teacher Education, Review of the Literature, High-quality group

Abstract

Purpose of this study is reveal the meaning of Sensitivity in the review of the literature. There are 2 objectives in this study. First, sort out the history of Kurt Lewin's study about sensitivity, and "what is sensitivity of teacher" and "how did sensitivity involve and develop in the field of education research". Second, take the results of objective 1 as one of the references, find out clues for solving the problem of how to be an excellent teacher in practice. The main results obtained were as follows:

1. First time sensitivity introduced into education field was for solving the problem of racial discrimination in American school in 1950s.
2. "Sensitivity" is comprehended as ability to get solutions and its ability is intended to improve the relationship with the other members in the group.
3. Recent years, training has been done to enhance the "sensitivity" of educational trainee. However, the necessity and effectivity of enhance trainee' sensitivity is still doubtful in published researches.